

流れ星のように尾を引きながら高速で進む白い光。小惑星探査機「はやぶさ2」のカプセルが大気圏に再突入する映像は記憶に新しい。このカプセルの位置情報を取得するために用いたのが「光学観測係」と呼ばれる特殊なカメラシステムで、湯本電機（大阪市東成区、湯本秀逸社長）は、筐体部分の製作を担った。「試作でもなく量産でもない」1点ものの製作を続ける同社のモノづくり戦略を追った。（大阪・大川藍）

**素早い対応力**  
 数ある金属加工業の中から湯本電機が重要なのは、「設計や製造がぶさ2のために開発されたのは、銀色の筐体に二つのカメラを固定した観測機器だ。1台は星の方向から計測器自身の位置情報を把握するカメラ、もう1台はカプセルを撮影するもの。2台のカメラの情報からカプセルの落下地点を正確に割り出し、できるだけ早く回収してチームの管理下に置くことを目的とする。天候に関係なく位置情報を安定的に確認できるよう、はやぶさ2の観測から初めて航空機に搭載された。

②4

はやぶさ2を作った  
**サムライ企業**

**湯本電機**

**「光学観測係」の筐体**



湯本電機はJAXAの開発した光学観測係のうち、2台のカメラを支えるアルミ筐体を製作した（JAXA提供）

「JAXAの間を割く」(JAXA担当者)ため、航空宇宙分野において納期や品質は開発を左右する重要な要素となる。湯本電機は複雑な形状の削り出し部品を1〜2週間で確実に納品

「JAXAや大学関連の部品製造を引き受けるようになったから、

数人を専任で置く力の入れようは町工場としては珍しい。

**宇宙に活路**

「ビジネスとして成り立ちにくい」オーダーメイド品の製造を同社が続けるのは一何をしていく会社か聞かれたとき、「ロケット、衛星の部品を作っている」と言えることが社員のモチベーションになる」からだ。量産品を引き受けて売り上げを伸ばしても、価格競争に陥れば持続的なモノづくりはできない。付加価値の高い製品を少量でも作り続けることが社員のやる気を高め、会社の技術を底上げすると湯本は信じている。

**「宇宙の仕事」社員の誇りに**



はやぶさ2の部品製作に携わった経験は社員の大きな励みになる（JAXAからの感謝状を手に湯本電機提供）

京都大学や大阪大学、神戸大学など、京阪神の難関大学出身者の入社も増えた。湯本は若く優秀な人材を集めることに成功した。湯本には交流サイト(SN)でのアピールも重要」と見据える。今回、航空機に搭載した光学観測係は、強化のため、米国への念ながら筐体部分以外、営業所設立も視野に入れているという。

**「1点もの」確実に作る**

「理想は部品でなく、一つの製品を作ること」。その実現に向け、素早く正確なモノづくりの探求は続く。（敬称略）